

**共同研究プロジェクト紹介 基幹型：方言の形成過程解明のための全国方言調査 方言分布の変化をとらえた！**

著者	大西 拓一郎
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	5
号	2
ページ	68-77
発行年	2014-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000773">http://doi.org/10.15084/00000773</a>

## 方言分布の変化をとらえた！

We've Captured Changes in Dialect Distributions!

大西 拓一郎 (ONISHI Takuichiro)

### 1. はじめに

方言は場所によることばの違いである。場所による違いであるから、そのようすを地図に描くこともできる。そのような方言がどのようにしてできたのか。その原初の姿を見ることはもちろんできない。しかし、現在も場所によることばの違いが生まれているとすれば、方言の発生と分布の形成に迫ることができるはずである。私たちのプロジェクトは、このことを目標に過去と同じ分布調査を実施し、時間を隔てた方言分布の比較を行っている。ここでは、研究を通してとらえられたことばと分布の変化について紹介する。

### 2. 実時間の中で、ことばの変化、分布の変化をとらえるということ

まずは私たちのプロジェクトが研究目標に向けて、具体的にどのようなことを行ってきたのかを記すことにする。

#### 2.1 見かけ時間と実時間

ことばは変化するとされている。方言もことばだから、必ず変化するはずである。特定の場所の方言に変化が起ると、分布も変わるはずである。ここで言う変化とは、活用の語形変化のようなものではなく、時間の流れに応じて起こることを指している。したがって、変化をとらえるには何らかの方法で時間の差があるデータを得ることが必要である。その場合の方法は2通りあり、一つは見かけ時間によるもので、もう一つは実時間による方法である。前者は、世代差を用いる。同時代における同じ場所の上と下の世代を較べることで世代差を時間の差に置き換えて考えようとする。実際の時間の差ではないことから見かけ時間と呼ばれる。後者は、本当に30年や50年といった時間の間隔をおいて調査する。

それぞれ一長一短がある。見かけ時間による方法は同じ時期に一度に時間差に相当するデータが得られることから、調査効率が高い。実際これまでもこの方法による研究は少なからずなされてきた。ただし、得られたデータが本当に時間差に対応するものなのか、成長に応じて習得されたものなのかという問題が常につきまとう。例えば、少年層と老年層の敬語のデータを比較した結果、少年層の方が敬語の使用が少ないからといって、敬語の使用が減少する変化が起こったとは必ずしも言えない。敬語の使用は、大人の社会に入ってから習得

することがあるからだ。それに対し、実時間による方法は、それぞれの調査時における対象世代などの条件をそろえれば、実際の時間の流れの中のできごとをとらえることができる。ただし、当然のことながら、間隔として想定するだけの期間（例えば30年とか50年）が研究に求められる。

## 2.2 臨地調査

方言の分布調査は、手間を要する。50地点でも100地点でも、分布を調べようと思えば、それだけの地点からデータを得ることが必要である。電話や手紙やインターネットを使って調査すれば経済的だという考え方もあるかもしれない。しかし、実際にそれぞれの場所に行って、方言を使っている人達から話を聞くのがなんと言っても一番の方法である。使っていることばやそのことばが指す対象をめぐる周辺のことも含め、さまざまな情報が得られるからだ<sup>1</sup>。ましてや、比較する元のデータがそのような直接足を運ぶ方法をとっているなら、従前の方法を変えないに越したことはない。

ということは、とても手間がかかることになる。実時間に基づく方言分布の経年比較という研究は、手間がかかる上に長い研究期間を要するものなのである。だから、至極までもで直接的な研究方法ではあるが、これまでほとんど実施されることがなかった。

ところで、広狭にかかわらずある特定の範囲を対象にする場合、おおむね200地点程度は調査しないと、分布としては取り扱いづらく、基本的には多ければ多い方が良い。ただし、研究プロジェクトには計画期間というものがある。『方言文法全国地図』（全6巻、国立国語研究所編、1989～2006年、財務省印刷局）などの過去の調査<sup>2</sup>とも照らし合わせて、私たちのプロジェクトでは、全国で500地点を調査することを目標にした。2014年7月現在、その目標はほぼ達成された。

研究を開始する当初は、本当に変化が得られるのか、変化がとらえられても今の時代、全国がいつせいに標準語になるような結果しか出てこないのではないかといった危惧の念が寄せられることもないわけではなかった。結果的には標準語化ではない、これまで言語変化の研究で明らかにされてきた、言い方を換えれば「普通の変化」をとらえることができた。「普通の」とは書いたが、これまで歴史言語学など言語の史的研究で明らかにされてきたことは、文献をたどるなり、推定によりさかのぼるなり、いずれにせよ理論的に考えられてきたことであり、それを眼前の事実としてとらえたことには大きな意味があると考えている。

むろん、私たちもいきなり500地点の調査にのぞんだわけではない。事前に全国を対象とした準備調査を行うとともに、比較的狭い地域で詳細な調査を実施した上で、その手応えをもとに開始したものである。調査項目を設定するにあたっては変化の方向を予測してそれを行った。また、全国500地点となると限られた期間内に数名で調査を達成することは無理で

<sup>1</sup> プロジェクトが本格的に稼働する前に調査会社による調査を試験的に実施したが、研究に耐えるような信頼性の高いデータは得られなかった。

<sup>2</sup> 後述する『日本言語地図』のほか、各地で編集された言語地図集が約400冊あり、それらの調査から現在30年～50年を経ている。

ある。そこで、100名弱の研究者でプロジェクトを組織し、全国を分担しながら調査した。同時にこれだけの人が関わると、調査や報告にばらつきが出てくる可能性がある。それを最小限に抑えるために、一定の方法に従えるような調査票やマニュアルを準備した。そして、調査結果は、順次データベース化し、調査に携わった研究者全員がそれを共有できるようにした。以下で示すのもそのデータベースをもとにするものである。なお、データベースは修正などが逐次行われているため、現時点では未完成であり、ここでは2014年3月ないしは4月段階でのデータに基づくことをことわっておく。それほど大きな違いは出ないとは思われるが、最終的な結果とは異なる可能性は残されている。

### 3. ナンキンカボチャの生まれるところ

方言の変化を扱う場合、「接触」がしばしばキーワードになる。この場合の接触は、複数の方言が出会うことを言うが、もちろん実際に接触するのは、方言を使う「人」である。人どうしの接触を通して、ことば（この場合は単語）が混ざることがある。「つかまえる」と「とらえる」が混ざって「とらまえる」が生まれた標準語の例がよく知られる。このような変化は「混交」と呼ばれる<sup>3</sup>。方言の世界では、異なる単語どうしの分布領域の境界で、それぞれの使用者の接触を通して混交が起これると考えられる。

私たちの調査（以下では、プロジェクトの英語名 Field Research Project to Analyze the Formation Process of Japanese Dialects から FPJD と略称する）では、野菜の「かぼちゃ」を表すナンキンカボチャという語形が全国4地点から得られた。この語形は、「かぼちゃ」を表すナンキンとカボチャの混交により発生したものと考えられる<sup>4</sup>。FPJD からさかのぼること50年、1957年から1965年にかけて国立国語研究所は全国の方言調査を行い、『日本言語地図』（以下、LAJ）を刊行した。50年前のLAJにおける「かぼちゃ」に現れたナンキンとカボチャの分布と現在のFPJDで得られたナンキンカボチャの分布を重ねると図1のような興味深い事実が得られた。

この図では、50年前（LAJ）のナンキンとカボチャの使用地点を塗りつぶさない△と○で、現在のナンキンカボチャの使用地点を塗りつぶした★で表している。現在、ナンキンカボチャが用いられているところは、50年前にナンキンが使われていたところとカボチャが使われていたところのちょうど境目にあたるのがわかる。つまり、かつてナンキンを使う人とカボチャを使う人が接していたようなところでナンキンカボチャが生まれたことになる。LAJでもナンキンカボチャは現れるが、場所が全く違って、現在の場所では用いられていなかった。50年前には接触しても、現在の使用地点では混交形のナンキンカボチャはまだ生まれていなかったのだろう。その後、混交でナンキンカボチャが生まれ、次の世代以降でそ

<sup>3</sup> 混交は混淆と表記されることもあり、また、コンタミネーションと呼ばれることもある。方言分布に見られる混交については、沢木（1987）が整理している。

<sup>4</sup> 混交の扱いにおいては、馬瀬（1992: 78-94）が記すように、語の構成要素が  $XfXb$  と  $YfYb$  ( $f, b$  はそれぞれ前部要素、後部要素) の接触から  $XfYb$  のような語が生まれることを指すことが多いが、ナンキンカボチャのように全体がつながった形も含まれる。

れが使用されるようになった。FPJD では、それをとらえることができた。実は FPJD でもナンキンとカボチャはそれぞれ得られているが、ナンキンカボチャはそれらの接触領域ではない。

50 年前に調査を実施し、そのときにおける使用地点がとらえられていたからこそ、現在におけるナンキンカボチャの出生元がわかった。気の長い話ではあるが、多くの場合、解釈の中での推定にとどまっていた混交を約半世紀の間隔で経年調査を実行することで、はじめて実証できたことになる。混交という言葉変化は机上の理論にとどまるものではなく、実際に起こっている変化であることがわかる。

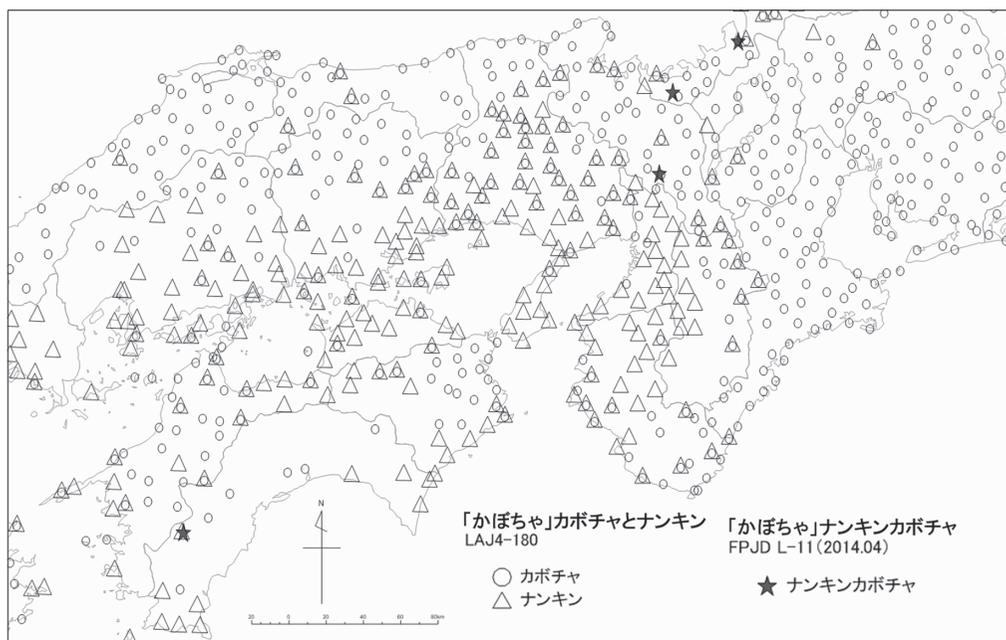


図1 LAJによる50年前のカボチャとナンキンの分布と  
FPJDによる現在のナンキンカボチャの分布

#### 4. ンカッタの台頭

多くの人は、イカンカッタ・イカヘンカッタ(行かなかった), ヨマンカッタ・ヨマヘンカッタ(読まなかった)という言い方を耳にすると、大阪弁や関西弁というイメージを抱くのではないだろうか。実際、それは間違いではない。ただし、実はそれは最近のことである。1979年から1982年の調査に基づく国立国語研究所編『方言文法全国地図』(以下、GAJ)を見ると、30年くらい前までは、大阪府の中心部で(当時の高年層)はこれらの「なかった」(動詞否定辞過去形)にあたるンカッタ、ヘンカッタ(以下では、まとめてンカッタ)は、用いられていなかったことがわかる。

図2に30年前(GAJ)の分布を塗りつぶさない□◇で、現在の分布を塗りつぶした■◆

でそれぞれ表した。この図が示すように、30年前にも確かに近畿地方で用いられていた。しかし、それは大阪府でも南端で、その他は和歌山県、兵庫県の一部であった。それが現在では大阪府の全域に広がっている。

他の地方に目を向けると、近畿地方よりも西の岡山県、香川県、高知県でもこの30年間にンカットが新たに広がったことがわかる。一方、広島県、島根県、山口県は30年前から用いられていて、その使用領域はほぼ変わっていない。

愛知県では30年前から使用されていたが、この30年の間にほぼ全県に広がったようである。少し意外に思われるかもしれないのは新潟県である。ここでは中国地方西部と同様に30年前からンカットが用いられていて、現在の分布もほとんど同じである。

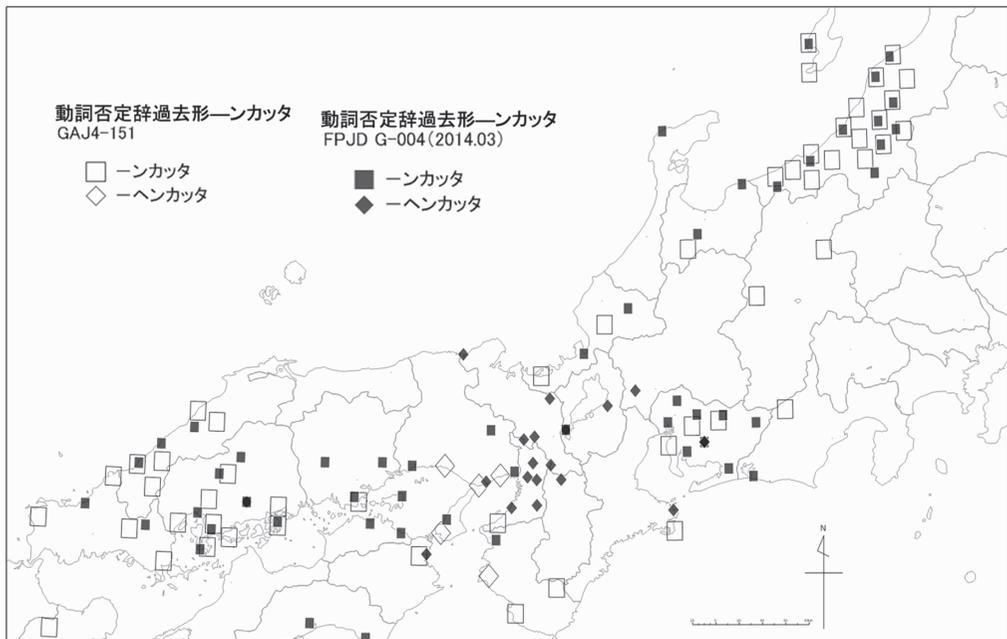


図2 動詞否定辞過去形のンカット：GAJ（30年前）とFPJD（現在）

以上からわかるように、動詞否定辞過去形のンカットは大阪弁が広まったものではない。むしろ、大阪は後発である。新潟、愛知、中国地方西部のようすが示すようにそれぞれの場所で別々に生まれたものである。それではなぜこのように同じ形が生み出されたのか。その原因は、ンカット以前の形にある。

もともと近畿を中心に広く使われていたのはナンダであった（行カナンダ、読マナンダなど）。このナンダは書きことばでも用いられる標準的な形であったが、語源未詳の非分析的な（形式の切れ目などがとらえづらい）形である（大西 1999）。そのために動詞の否定辞は、現在形はン（行カン、読マン）、過去形はナンダ（行カナンダ、読マナンダ）であり、形式上の統一を欠いた不規則な活用を持つことになる。

一方、中国地方ではザツタが用いられていた。これはザルの過去形にあたるはずだが、現在形でザルは用いられない。したがって、現在形はン（行カン、読マン）、過去形はザツタ（行カザツタ、読マザツタ）であり、こちらも不規則な活用である。

動詞（行く、読む）は基本的に動作を表すが、その否定（行かない、読まない）は状態性に意味素性が変わる。そのような状態性を表す典型は形容詞である。そこで、ナンダやザツタといった不規則な形を捨て、形容詞の過去形（高かった、低かった、など）の語尾のカッタを取り込んで、生み出されたのがンカッタである。ン（行カン、読マン）、ンカッタ（行カンカッタ、読マンカッタ）であれば、形式上の統一がとれるようになる。

このように同じような条件がそろえば、まったく異なる場所で同等の形が生み出されることはGAJに対する分析からも予測されていたことであるが、実際にそれが起こること、しかもよく知られる「方言圏論」（柳田国男 1930）にそぐわない形で地方が先導して発生することがあることが、実時間によるデータから実証されたことになる。

## 5. ズラからダラへ

雨ズラ、雪ズラ（雨だろう、雪だろう）といった言い方は、長野県、山梨県、静岡県でよく使われる。ズラは、これらの例のように名詞に接続した場合、「雨だろう」「雪だろう」における「だろう」相当の名詞述語推量辞として機能する。特に静岡県では、静岡鉄道の依頼で北原白秋が作詞した「ちゃつきり節」の一節にも現れることから、ズラは静岡県方言の代表として地元でも受けとめられている。実際、「〇〇ずら饅頭」のような名前のおみやげが店頭に並んでいるのを見た（そして、買って、食べた）ことがある。

それほどよく知られ、なじまれているズラであるが、語源は諸説あって定説を見ない。「だろう」に該当することから、この地域の断定辞ダ（標準語形と同じ形）が含まれていれば納得がいくが、頭の形がダではなくズだから、うまく説明がつかないのである。

この地域には推量辞として別にラもある。このラは動詞や形容詞には接続できるが、名詞には接続しない<sup>5</sup>。つまり、行クラ、寒イラは言えるが、雨ラ、雪ラとは言えず、雨ズラ、雪ズラが方言の文法に沿った言い方なのである。整理すると次のようになる。

	言い切り	推量
動詞	行ク	行クラ
形容詞	寒イ	寒イラ
名詞	雨ダ	雨ズラ

並べてみると、雨ズラではなく、雨ダラなら動詞、形容詞、名詞といった品詞の別に関わらず、すべて、言い切りの形にラを付けるだけのシンプルな体系になることに気付くだろう。

<sup>5</sup> ズラは動詞にも形容詞にも行クズラ、寒イズラのように接続できる。なおその場合、行クズラと行クラ、寒イズラと寒イラの間には意味用法に異なりがあることが知られている（小林 1978, 吉田 1996）。

図3には、名詞述語推量辞について、GAJに見られる30年前の分布と現在の分布を合わせて示した。□や右向きの△など塗りつぶさない記号が30年前の分布で、■や右向きの▲など塗りつぶした記号が現在の分布である。長野県、山梨県はほぼ変化が見られない（長野県北部についてはデータベース化がやや遅れているため、ここでは除外して考える）。一方、静岡県に目を向けると、西部の沿岸近くにおいて30年前にはなかった場所にダラが現れている。さらに東を見ると、2箇所でダラが新しく用いられるようになってきたことがわかる。しかもこの2箇所は、もはやズラを使わなくなっている。

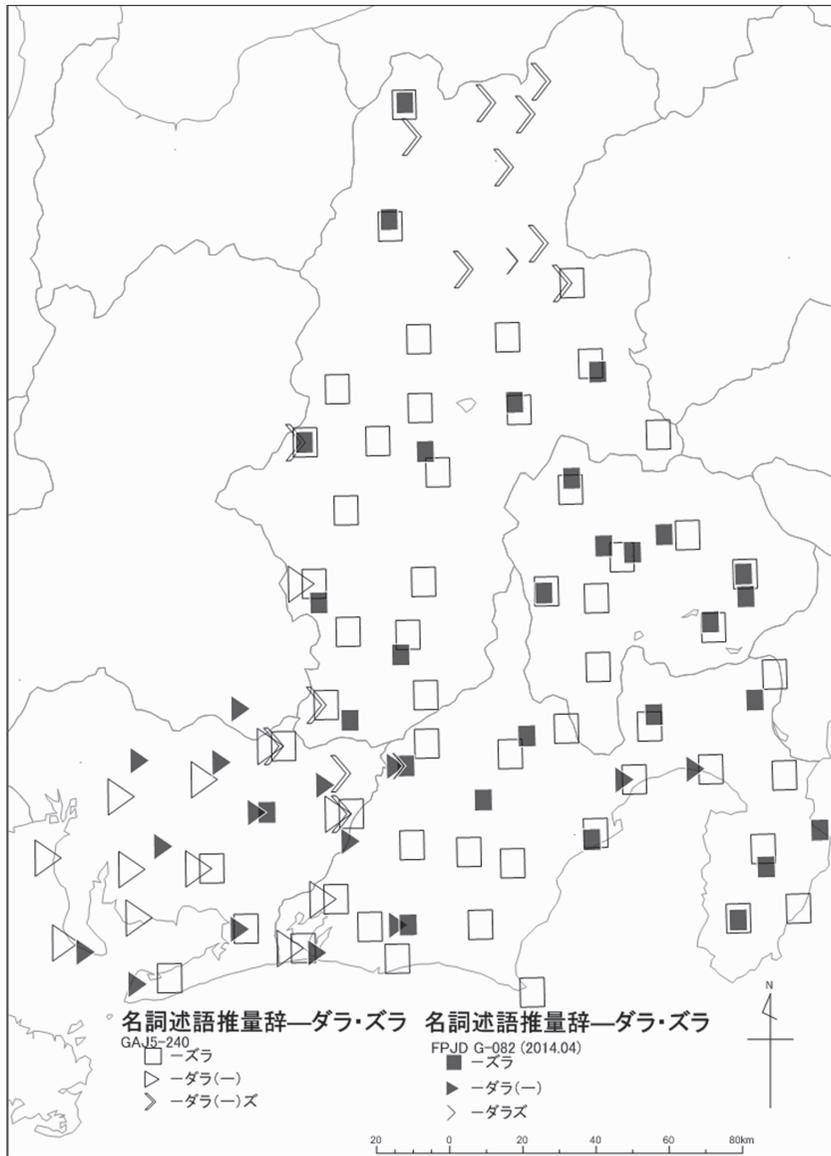


図3 中部地方におけるズラとダラの30年

地図が表す通り、実は、30年前には愛知県の東半でもズラは使われていた。それが現在では1箇所を除き、消えてしまっている。ズラからダラへという流れは、静岡県東部、愛知県東部とそれぞれ離れた場所で進行しているわけである。したがって、現在の静岡県中部のズラは、いわば東と西からダラにはさまれるような形で残っていることになる。

ことばの体系面からすれば、山梨県にしても長野県にしても事情は、同じである。もうひと押しがあれば、ズラからダラに変化しても不思議はない。20年後、30年後はどうなっていることだろうか。

## 6. 言語変化はぞくぞくと？

このほかにも経年比較を通して、言語変化とそれともなう分布変化がぞくぞくと見つかっている。4年かけて実施した全国調査の結果がいよいよ研究に活かされるときを迎えた。今後、このデータを活用した発表や論文がぞくぞくと出てくることを期待したい。

ぞくぞく見つかる言語変化とぞくぞく出てくる論文というのは景気のいい(?)話ではあるが、このことは言語変化がぞくぞくと発生しているということと同じではない点には注意を喚起しておきたい。先にも記した通り、私たちの研究ではもともと変化の発生を予想して対象を設定している。その点からすれば、言語変化が見つかるのは、うれしいことではあるが、当然のことでもある。そのような対象設定ゆえに、予測が妥当であれば言語変化が多々見つかるということになるからだ。したがって、このことは現実世界の状況を反映していることにはならない。むしろ、コミュニケーションの道具ということばの本質からすれば、変化しない方が普通の状態であるはずだ。新潟のシカッタのように変化しない事例も多く見いだされている。変化しないことの重要性もわれわれのデータは示唆している。

### ●参考文献●

- 小林伸子(1978)「長野県茅野方言の推量表現について―「～ズラ」と「～ラ」の違い」『日本語研究』1: 223-230. 東京都立大学国語学研究室.
- 馬瀬良雄(1992)『言語地理学研究』東京: 桜楓社.
- 大西拓一郎(1999)「新しい方言と古い方言の全国分布―ナンダ・ナカッタなど打消過去の表現をめぐって―」『日本語学』13(18): 97-110.
- 沢木幹栄(1987)「言語地図に見るコンタミネーション」『言語生活』429: 60-64.
- 柳田国男(1930)『蝸牛考』東京: 刀江書院.
- 吉田雅子(1996)「山梨西部方言における推量表現」『国文学論集』29: 87-102. 上智大学国文学会.

《要旨》 私たちのプロジェクトは方言分布を対象にして、経年調査を実施し、方言の形成過程を明らかにしようとしている。全国500地点において、実際に30年から50年程度の比較を可能にする方言分布のデータを得た。その中から現実に発生している言語変化をとらえることができた。新たに発生していることが確認されたナンキンカボチャは50年前

にナンキンとカボチャが分布していた境界にあり、両者の混交で生まれたことを示している。動詞否定辞過去形のンカッタは自律的に発生した形で、複数箇所において別々に発生しており、30年前と比べると近畿地方中央部に広がるとともに、中国地方西部や新潟県ではすでに分布領域が確定していたことがわかる。名詞述語推量辞のズラは中部地方の代表的な方言形式であるが、静岡県を中心にコピュラ形式を内包するダラに変化しつつあることが明らかになった。ただし、経年比較を通して言語変化が多数見つかるからといって、現実のことは全体が変動し続けているわけではないことには注意が必要である。

**Abstract:** This project aims to use real-time comparison to elucidate the process by which dialectal distributions are formed. We have obtained dialect data from 500 locations that allow comparisons over intervals of 30 to 50 years, and as a result, we have been able to document changes as they were taking place. We find NANKINKABOCHA distributed at the boundary between locations that 50 years ago had NANKIN or KABOCHA, which shows that it is a blend (called as contamination in geolinguistics) of these two words. NKATTA, a past-tense negative suffix for verbs, arose independently in different places. It has diffused into the center of the Kinki region over the last 30 years, and it was already established in the western part of the Chūgoku region and in Niigata prefecture 30 years ago. ZURA is a conjectural suffix for nouns, and it is a representative form in the Chūbu dialect. But especially in Shizuoka prefecture, it has shown a tendency to change into DARA, which can be construed as a form of the copula. We must keep in mind, however, that an entire language is not continually fluctuating, even if many individual changes are found in the real-time comparison data.

## 大西 拓一郎 (おおにし・たくいちろう)

国立国語研究所時空間変異研究系教授。文学修士。東北大学助手、国立国語研究所室長・主任研究官を経て、2009年10月より現職。

主な著書・論文：『現代方言の世界』（朝倉書店、2008）、Mapping the Japanese languages (*Language and space: An international handbook of linguistic variation: Language mapping*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 2010)、「言語地理学的研究目標は神魔？」（『語言教学与研究』151, 2011）。

社会活動：日本語学会評議員。

**基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」**  
プロジェクトリーダー 大西拓一郎（国立国語研究所 時空間変異研究系 教授）

**プロジェクトの概要**

日本語の方言分布がどのようにしてできたのかを明らかにすることを目的に、全国の方言研究者が共同でデータを収集・共有しながら進める研究である。日本の方言学においては、言語の地域差を詳細に調査し地図に描く言語地理学的手法に基づく研究を50年以上前から本格的に開始した。国立国語研究所が『日本言語地図』『方言文法全国地図』という全国地図を刊行する一方、大学の研究室を中心に地域を対象とした詳細な地図が数多く作成されてきた。そこで把握される方言の分布を説明する基本原理は、中心から分布が広がると考える「方言圏論」である。問題はその原理の検証が十分に行われてこなかった点にある。幸いにして日本には長期にわたる方言分布研究の蓄積があり、現在の分布を明らかにすることで時間を隔てた分布の変化が解明できると考えられる。具体データをもとに方言とその分布の変化の解明に挑戦する、世界にも例のないダイナミックな研究を目指す。